

職人氣質(1937年4月にラジオ放送)

A Translation of Virginia Woolf's "Craftsmanship" broadcast in April 1937,
from *The Death of the Moth and Other Essays*(1942)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

(和歌山大学教育学部英語教室)

2015年9月30日受理

このシリーズのタイトルは「ことばではうまく表現できない」です。今回は「職人氣質^{craftsmanship}」ということでお話ししましょう。ここではことばの技巧、言い換えると作家の職人氣質についてお話しすることになっております。でも「職人氣質」ということばは「ことば^{words}」と一緒に用いるとどこか調和しない、しっくりこないところもございます。窮地に陥ったときに必ずめくる英語の辞書、これを見てもはっきりしません。辞書では、「技術^{craft}」ということばには二つの意味があるということです。まず固体から役に立つものを作り出すこと、例えばポット、椅子、テーブル。つぎに「技術」ということばは丸め込み、狡猾、詐欺を意味します。となるとことばについて確定的なものはほとんど分からないということです。でも、このことは分かります：ことばは実用のもので、役に立つものは決して作りださない。でもことばは真実を、真実のみを話す唯一の手段です。ですから、ことばに関して技術を語るということは二つの相容れない概念をつなぎ合わせるということになります。もしそれが掛け合わされれば、それこそ博物館のガラスケースにびったりの怪物を生み出すことができることになります。ですから、今日のおしゃべりのタイトルはすぐに変更しなくちゃなりませんね。別のもの、たとえば「ことばの散歩道」とかなんとかに置き換えなくちゃ。というもおしゃべりの首を切り落としたり、きっと斬首された雌鳥みたいに跳び回ります。ぐるぐる走り回って、ついには死んで倒れてしまいます。そうしてだれが雌鳥を殺したかということになるのです。で、そういうのが首を落とされたおしゃべりの運命、あるいは堂々巡りと言って良いでしょう。では話の出だしとして、ことばは実用には役立たずだという言い回しから取り上げてみましょう。このことばは幸いにも証明の必要はほとんどありません。そのことはよく分かっていることだからです。たとえば地下鉄に乗って移動しているとき、ホームで電車〔訳注：ロンドンの地下鉄が電化されたのは1890年11月4日。King William Street Station～Stockwell間がまず電化さ

れた〕を待っているとき、ほら目の前の電光掲示板に「^Pa^ssⁱn^g ^Ru^ss^el^l ^Sq^ua^re」という文字が掲げられます。そのことばをわたしたちは見ます。口に出して繰り返します。その役に立つ事実をここに刻もうとするのです。つぎの列車がラッセル広場を通ります。ホームを行ったり来たりして、「ラッセル広場を通過、ラッセル広場を通過」と何度も何度も繰り返します。するとその単語がまぜこぜになって変化して、いつの間にかこう口ずさんでいるのです：「過ぎたりと、この世は言いたり、過ぎたり...木々の葉が朽ち落ちて、霧がその重荷を地上へとしずくとともに落とす。人間がやってきた...」〔訳注：前半はChristina Rossetti、後半は改変を加えてTennysonの詩からThe leaves decay and fall, the vapours weep their burthen to the ground. Man comes...〕それから我に返ると、自分がキングスクロス駅に到着したことに気づくのです。別の例を見てみましょう。客車の中、今座っている席の向かい側にこう書いてあります：「^Do ⁿo^t ^le^an ^ou^t ^of ^th^e ^wiⁿd^ow」〔窓から身を乗り出さないでください〕。最初に読んだだけで、その有用な意味、つまり表面上の意味が伝えられます。しかし座ってそのことばを見ていると、すぐに単語が入れ替わり変化します。そしてこうわたしたちは言い始めるのです：「窓、そう窓よ—開き窓は、寂しきおとぎの国の荒れ狂ふ、泡立つ波に向かひて開き」〔訳注：後半はKeatsの詩からcasements opening on the foam of perilous seas in faery lands forloan〕。そうして自分が何をしているかも分からぬうちに、窓から身を乗り出しているのです。目は異国の麦畑で涙を流すルツ〔訳注：Ode to the Nightingaleで語られる女。旧約聖書「ルツ記」で語られる献身的な寡婦〕を探しています。窓から身体を乗り出せば、二〇ポンドの罰金か、首の骨を折るかということになります。このことは、証明が必要とあれば、ことばというのが役に立つものになるに必要な、持ち前の才能にどれだけ欠けているかということを証明しているのです。本質に逆らってことばを実用的なものにしようとすると、そのしっぺ返しを食らってことばにだまされ、ご

まかされ、頭にバシッと鞭を一打ち食らうことになり
ます。ことばにわたしたちはこうしてたびたびごまか
されてきました、有用であるのをいやがっているんだ
ということのことばはずっと示してきました。ひとつ
の意味を表すのではなく、いくつもの可能性を表すとい
うのがその本質だということをずっと示してきました。
たびたびことばはそうすることで、わたしたちには
嬉しいことに、事実^{language}に直面し始めるというわけ
です。もうひとつの言語^{statement}を作り始めるというわけ
です。役に立つ^{statement}陳述を表すに完全にそして美しく調整された言語、
記号による言語を作り始めているのです。この言語に
はひとりの偉大な達人がいます。この人にわたしたち
はみな恩恵を受けていますが、男なのか女なのか、あ
るいはまた肉体を持たない霊なのか誰も知りません。
その人は名もなき作家で、ミシュランのガイドブック
にホテルのことを描き出します。たとえばあるホテル
がほどほどのものだとしましょう、つぎのホテルは良
い、そのつぎのはその地域では一番良い。ではどのよ
うに描き出すのでしょうか。ことばを使わずに描き出
すのです。ことばを使うと、植え込みもビリヤード台
も、客だろうが従業員だろうが男も女も、昇りくる月
も夏の海のゆったりとした波音も目の前に映し出して
くれます。良いものはみな目の前にでてくるのです。
でもあらゆるものが的外れ。そこでミシュランの達人
は記号を用いるのです。旅館だったら、切り妻の印を
一つ、二つ、三つ。それがすべて、そして言わなくて
はならないこと。ベデカーの達人はさらにこの記号を
芸術の域にまで抜群に高めています。ある絵が良いも
のだとしましょう。そのときは一つ星。とても良けれ
ば、二つ星。達人の意見では卓越した才能が作り出し
た作品だとすれば、三個の黒い星がページ上に輝くこ
とになります。そしてそれだけなのです。星と短剣の
印を用いれば、芸術の批評、とりわけ文芸批評は六ペ
ンスで手に入る本のサイズにまで小さくできるでしょ
う。たびたびわたしたちはそう願うはずです。しかし
このことは、作家は将来自由に用いる言語を二つ手許
に置いておくということを示しています。ひとつは事
実を描写するのに、もうひとつは虚構を作り出すため
に。伝記作家が、ある有益で重要な事実を伝えなくて
はならないとき、まあたとえば、オリバー・スミスが
大学に進学して、1892年には三席だったと言いたい
とき、5という数字の上に○をつけてその意味とする。
ジョンがベルを鳴らすと、少しして小間使いがドアを
開け、「ジョーンズ様はご不在です」という場面にさし
かかったとき、そのいやな陳述をことばではなく、記
号で伝える、たとえば3という数字の上に大文字のH
を書いて伝えるということになりましょう。こうなれ
ば読者には大もうけ、当の小説家はほっとすること
になります。こうして、伝記とか小説が贅肉をそぎ落
した薄いものになる日が来るのを待ち望むことができる

のです。ことばで「窓の外に身を乗り出さないでくだ
さい」と言っていた鉄道会社も言語の不適切な使用で
五ポンド以下の罰金となる日も来るでしょう。

だからことばは役には立たないのです。で、ことば
の別の特質を考えてみましょう。その実際的な特質を。
つまり真実を語る力です。もう一度辞書に当たってみ
ますと、真実には少なくとも三種あります。神つまり
福音の真実、文学的真実、そして明白な真実(一般的
に、あからさまな真実ということです)。でもそれぞれ
をひとつひとつ考えていたのでは時間がかかります。
だからもっと簡単に考えて、真実かどうかを試す唯一
のものは寿命の長さですから、それからことばはほか
のどんなものより長く時間の急変つまり変化に耐えて
生き延びていきますので、ことばはもっともよく真実
を伝えるものなのです。建物は崩れ落ちます。地球で
さえ滅びます。昨日麦畑だったところが今日は平屋の
建物になります。でもことばは、きちんと使われれば
永遠に生き延びてゆくことができるようです。だから
つぎに出てくる疑問は、ことばのきちんとした使い方
というのは何なのかということです。前にも言ったよ
うに、役に立つ陳述をするということではありません。
だって役に立つ陳述というのはたったひとつのことし
か意味することはできないからです。多くのことを意
味するというのがことばの本質なのです。こういう単
純な文を考えてみましょう：「ラッセル・スクエアを
通過しています」。さっき言ったことは役に立ちませ
ん。表面上の意味以外にも多くの隠れた意味がたくさん
隠されているからです。「通過しています」というこ
とばはものごとの流動性を示唆します。たとえば時間
とか人間の生活の変化とか。それから「ラッセル」と
いうことばは木の葉のこすれる音、磨かれた床を滑る
スカート、そしてベッドフォードの公爵館、それから
イギリスの歴史の半分を示唆します。最後の「スクエ
ア」ということばは化粧漆喰のくっきりとした輪郭と
同時に実際の正方形の形を目の前に浮かび上がらせて
くれます。こうしてもっとも単純に見えるひとつの文
は空想を、記憶をかき立て、視覚と聴覚を刺戟します。
そして実際にそれを読む際にすべてが組み合わされて
いくのです。

しかしそれらは組み合わせられます、確かに組み合わ
されますが、無意識のうちにおこなわれるのです。こ
れまでやってきたようにそれらの示唆^{suggestions}を取り出して際
立たせるとすぐに、それらは非現実のものとなってし
まいます。それだけではなくわたしたち自身も現実の
ものではなくなります—例えば、専門家とか、知った
かぶりとか、名言の探求者とかに。そのときにはもう
読者ではなくなっているのです。文章を読む際には隠
れた意味は隠れたままに、ほのめかされたままに、明
言されないままにしないでなりません。川床に生え
る葦のようにそれぞれが流れに身を任せ絡み合うよう

に。でも上の文「ラッセル・スクエアを通過しています」のなかの単語はよちよちと歩み始めたばかりの単語です。それらの三単語はまだ経験したことの無い魔性の力の痕跡を示してはいません。そうした力は実はタイプライターから打ち出されるときではなく人間の脳から生まれたばかりのときに、ことばが身につけるものなのです。その力はその書き手を示すことができます。その性格、容貌、その妻、家族、そして家屋、暖炉の前でカーペットに寝そべる猫さえ示すことができます。なぜことばはこうしたことができるのか、どうやってことばはこうしたことをなすのか。どうすればそれを阻止できるのか、そうしたことは誰にもわかりません。ことばは書き手の意志とは無関係にそうするのです。それもたびたび書き手の意志に反して。書き手はだれも自分の惨めな性格や個人的秘密、悪癖を読者に見せようなんてきつと思わない。いったいタイプライターではない書き手がまったく自分をさらけ出すことなく書くことなんて、これまでだれかできていたのでしょうか。いつだって必ずその作品同様に書き手もわたしたちには識別できます。そういうことがことばの持つ暗示の力です。できの悪い本でさえもことばはたびたび愛すべき人間にしてくれます。できの良い本でさえも同じ部屋にいるのも耐えられないただの人間にしてしまいます。大昔何百年前に生まれたことばでさえこの力を持っています。ことばが新しければ、そのちからは強大で書き手が与えた意味のままにわたしたちは納得してしまいます。わたしたちが目にするのはそのことば。耳にするのもそのことばなのです。そのたったひとつの理由で、現在生きている書き手に対する評価がでたらめに良かったり、悪かったりするのです。書き手が亡くなってから初めてそのことばがある程度にまで生きた身体に降りかかっていたできごとから解き放され清められるのです。

さて示唆の力、これがことばの持つもっとも不思議な資産です。一文でも書いたことのある人でしたら誰でも、このことに^{words}気づいて、少なくともちょっとは気づいています。単語、とりわけ英語の単語はいろいろなものごとの痕跡、記憶、そして連想にあふれています—当然のことではありますが。それらは人々の唇、家々に、通りに、草原に、ずっと何世紀もの間散らばり、存在してきました。そうしてこのことが英単語を今日使う際の主たる難しさということになります。そうした単語はたくさん意味と記憶とを蓄えてきているので、他の単語などときわめて多くの結びつき、世に知られた結婚とでもいえば良いでしょうか、を結んでいるのです。たとえば、壮麗なる「^{incarnadine}深紅色の」という単語。この単語を使うと、「^{multitudinous seas}あまたの海」ということばを連想せずにはおれません〔訳注：『マクベス』〕。もちろん英語が新しい言語であった昔には、書き手は新しい単語を作り出すことも、それを使うことできまし

た。近年も新しい単語を作り出すことはたやすいことです。今まで経験したことの無い光景を見たとき、新しい感覚を感じたとき、新しい単語は唇に浮かび上がってきます。でもそれを使うことはできません。なぜなら言語自体が古いからです。古い言語の中で、できたての単語を使うことはできません。それは単語というのは単一の、他と切り離された存在ではなくほかの単語の一部であるという、明らかではあっても不可思議な事実によります。単語は、文章の一部となって初めて、単語となるのです。「深紅色の」という単語は「あまたの海」ということばにつながっているということ偉大な書き手だけが知っているとしても、単語はそれぞれの単語に互いの存在をゆだねています。新しい単語を古い単語につなぎ合わせることは文章の構成には致命的なものです。新しい単語をきちんと使用するには新しい言語を作り出さなくてはなりません。さだめしそういう議論に行き着くことにはなるでしょうが、そうしたことは目下のところ今やるべきことではありません。今やるべきことは英語という言語を使って何ができるかをありのままに見ることです。古い単語が生き残るように、美を生み出すように、そして真実を表すように、どうやって古い単語を新しい順序でどのようにつなぎ合わせるができるのか、そのことが問題となるのです。

そしてこの疑問に答えることのできる人はこの世界が差し出すどんな栄光の王冠にも値する人なのです。もし作文の技術を教えることができるなら、また学ぶことができるのなら、その疑問が何を意味するのか考えてみましょう。どんな本も、どんな新聞の記事も真実を述べ、美を作り出すかもしれせん。しかしそうなる途中には何らかの障壁があると思われせん。ことばを教えるという作業になんらかの障壁があるように思われせん。というのもこの瞬間にも何人もの大学教授が過去の文学について講義をしている、すくなくとも千人の批評家が現在の文学について論評を書いている、そして何百もの何百もの若い男女が最高の単位を取って英文学の試験に合格している、としても四百年前まだ全く講義も受けずに、批評も、教育もなかった時代よりも上手に作文を書いて、上手に読書をしているのでしょうか。ジョージ王朝時代(訳注：第一次大戦を挟んで、20世紀初頭の文学)の文学はエリザベス朝時代の文学に当てたつぎはぎに過ぎないのでしょうか。それならどこがいけないのでしょうか。教授連でもない、批評家たちでもない、作家でもない。すべてはことばです。責められるべきはことばなのです。それは自由奔放で手に負えない、いい加減で、指導に値しない。もちろんそれを辞書の中に捉え、アルファベット順に並べてきれいに整列させることはできます。でも単語は辞書の中で生きているではありません。ことばはわたしたちのこころの中で生きるのです。これの

証明がほしいなら、単語をもっとも必要とする感情が高ぶった瞬間に、その単語がひとつも見つからないことがいかに多いかを考えてみれば良いでしょう。それでも辞書は必要です。アルファベット順にまあ五十万ほどの単語が並べられ、わたしたちの自由になるのです。でもそれを使えるでしょうか。いや使えはしません。なぜって単語は辞書の中で生きているのではなく、わたしたちのころの中で生きているからです。もう一度辞書を眺めてみましょう。かならず『アントニーとクレオパトラ』よりも素晴らしい劇がたくさん転がっています。『ナイチンゲールに寄せて』という頌歌よりももっとすてきな詩があります。『高慢と偏見』や『デビッド・コパーフィールド』なんか素人のやつつけ仕事にしか見えないような素晴らしい小説があります。それは適切なことばを見つけ出し、それを適切な順序に並べるかどうかの問題にすぎません。でもそういうことはできません。なぜってことばは辞書の中で生きているわけではありません。ころの中で生きているからです。ではどのようにころの中で生きているのか。いろいろな具合に、経験からは推し量れない具合に、ちょうど人間が生きる具合に、あちらこちらと動き回って、そして恋に落ちて、そしてつながりあってという具合にころのなかに生きているのです。もちろん人間のように儀式や慣習で縛られているわけではありません。王室の単語も大衆の単語と結びつきます。英語の単語は、もしそうしたいと思えば、フランス語の単語、ドイツ語、インド語、黒人の使う単語とつながり合います。たしかに母国語たる英語の過去の歴史に足を踏み込まなければ、それだけ英語の評判を上げることはなりません。なぜって英語は流浪の、浮浪の娘であったからです。

ですから矯正の利かない浮浪女になんらかの規則をあてはめるなど役に立たないどころか、いけないことなのです。文法や綴りの些末な規則もわれわれが強制した束縛です。英語の単語について言えること、単語が生きている、深く暗い、気まぐれに明かりが明滅する洞窟、つまりころなのですが、の縁からのぞき見ると、英語の単語について言えることはどうも使われる前に使う人間に考え、感じてもらいたいようだと、単語自体を考えたり感じたりするのではなく、もっと別のことについて考えたり感じたりしてもらいたいということのようです。英語の単語は高度に敏感で、簡単に自意識過剰となります。その生まれの清らかさとか不純さとかのことを口にしてほしくはないのです。「純粹英語の会」なんて作ったら、反対に「不純英語の会」を作ってあからさまに嫌悪感を示すことになるでしょう。こういう事情で、現代英語で行うお話の多くには不自然な乱暴さがあるのです。それは純粹英語使用者に対する異議申し立てなのです。英語の

単語はまた高度に民主的でもあります。どの単語もどの単語も同じように単語界の良き市民だと思っています。教養の足りない単語も教養あふれる単語と同じ良き市民だと思っています。洗練されていない単語も洗練された単語同様良い市民なのです。英単語の社会には地位も称号もありません。ペンの先端でひとつ選び出されたり、個別に調べられたりするのには好みません。文章や段落の中でときには一時に何ページにもわたって団結しています。役に立つことを嫌っています。金もうけに使われることを嫌っている。公衆の前で四の五の講釈されるのを嫌っています。つまりひとつの意味を押しつけるようなものをすべて嫌うのです。こういう態度しか取ってはいけないうものを嫌っているのです。だって変化するのが英単語の本質ですから。

きっとそういうのが、変化する必要性が、英語の単語のもっとも顕著な特性です。それは英語ということばが捉えようとしている真実が多面的だからです。英語ということばは、その真実を単語自身が多面的であることによってこちらを照らし、あちらを照らししながら、伝えていくのです。こうして英語ということばはある人にはあるひとつの意味、別の人には別の意味を示してくれます。英語はあるひとつの世代には理解のできないものであっても、つぎの世代には(巡礼が持って行った杖同様)きわめて明白なものとなります。そしてこの複雑さの理由で英語は生き残っていくのです。きっと今日文章を書いている中に偉大な詩人が、小説家が、あるいは批評家がだれもいないわけは、わたしたちが英語に自由を認めていないということによるのです。英単語にひとつの意味、有用な意味、列車に乗るのに役立つ意味、試験を通してくれる意味しか認めないのです。そうして単一の意味しか認められないとき、英語は羽をたたみ死んでしまうのです。最後にそして強調して言いたいのですが、英単語というのはわたしたち人間同様、気ままに生きるための、プライバシーが必要なのです。きっと単語は、使われる前に、人間に考えさせたいのです。そして感じさせたいのです。でもまた立ち止まってもらうことも、無意識のままに使ってくれることも望んでいます。この無意識というのが単語にとってのプライバシーなのです。ひとのころのうちの暗闇がすなわち単語にとっての明かりとなるのです...こうした停止が起り、闇の帳が落ちて暗くなるとすぐに、単語同士がくっつき、すぐさま離れがたい婚姻関係を結ぶのです。それこそが完全無欠の姿であり、永遠の美を形作るのです。しかし違いますね。その種のことは、今夜は起りそうにありませんわ。小さな単語どもは怒り出しています。無愛想で、反抗的で、むっつりしています。ぼそぼそ何言っているのでしょうか。「はい時間です。喋らないでください」。